2 地域に根ざす劇場の伝統芸能支援 ——継承と創造

1 石見神楽とグラントワの活動

私は，中国山脈の山懐に抱かれた，島根県益田市美都町という，本当に大自然の中で生まれ育ちました。娯楽といえば，秋祭りに演じられる『石見神楽』（いわみかぐら）のみということで，その魅力に取りつかれまして，石見神楽を日本全国，世界各国に広めようと，個人的に取組みも続けています。神楽好きが昂じ，伝統芸能系の事業，とりわけ神楽事業の多くを今まで担当してきました。石見神楽を一言で表現すると，「勇壮優美・豪華絢爛」。芸能色が強いために，残念ながら学識者の評価は低いですが，地元民には絶大な支持を得ている伝統芸能です。伝統を守りながらも進化し続けている伝統芸能。伝承団体は約 150 程度あると言われていますが，正確な実態は摑めていないほどです。2020 年 5 月には「日本遺産」にも認定されました。

このような地域環境の中で，2005 年 10 月，美術館と劇場の複合施設，島根県芸術文化センター「グラントワ」がオープンし，劇場の主催事業の目玉の一つとして石見神楽を取り入れることになり，様々な事業を展開してきましたので，特徴的な事業を紹介いたします。

島根県石見地方を代表する伝統芸能『石見神楽』

まず，開館翌年から『石見の夜神楽 週末公演』を毎週日曜日に 7 年間続けて実施しました。現在は場所を市内の商業施設に変えて，毎週土曜日に行っています。課題としては，観光客誘致目的でありながら，実態は地元住民が 97%，観光のお客様が 3% ということで，いかにこの 3% を引き上げていくか。逆に，どれだけ地元住民の支持を石見神楽が得ているかということも言えるかと思います。成果としては，女性の神楽ファンが増えました。また，神楽社中の意識が変化しました。変化させたと言った方がいいのかもしれませんが，有料化によるお客様満足度の向上という意識を持たせる必要があるということです。初めて見るお客様には，この一瞬で「石見神楽はこういうものなのか」と評価をされますので，そういう怖さを社中の人に知ってもらいたいということで，色々な提案や話合いを行いました。そういう中で，地元神楽ファンの取捨選択が起き始め，社中にとっては恐ろしいような話でもあるわけです。

また，『しまね子ども神楽フェスティバル』を計 3 回行いました。開催目的は，発表の機会の確保と交流の促進です。後継者育成として石見神楽社中の多くは下部組織に子ども神楽団を組織していますが，成果を発表する機会が少ないのが実態です。他にも，2013 年には『ワールド神楽フェスティバル』として，韓国のムーダンやバリ舞踊なども出演する国際交流事業を開催しました。

海外公演では，ブラジル神楽団との交流が大きな成果となっていて，今も交流が続いています。また，サウジアラビアでも公演を行いました。これはチームジャパンの一員として石見神楽が選ばれたという名誉なことでした。また，東日本大震災の際に支援をしていただいた御礼の意味を込めて，日本文化を紹介するために，2013 年にアメ

リカ南部5都市公演（アトランタ，マレー，マーチン，ナッシュビル，マイアミ）に石見神楽が選ばれました。他にも『中米4ヵ国　国交80周年記念事業　石見神楽演舞』なども行っています。

さて，海外公演に行った若い伝承者は，現地ですごく人気者になりますので，「自分たちはジャニーズではないか!?」と錯覚して帰ってくるわけです。そういったことを他の団員に伝えて，どんどん連鎖していくのですが，私が海外公演に帯同したときに常に気を付けていることがあります。先人が延々と築いてきた日本の信用というものを，私たちが汚すわけにはいかないんだと。海外に行ってはじけたい気持ちは分かりますが，規律ある行動を取ること。最悪，国際問題に発展しかねないわけですから，気を付けたいところです。

まとめとしまして，伝統を受け継ぎながらも進化し続けている伝統芸能が石見神楽であるということ。少子高齢化が全国的に進むにつれて，伝承者不足が課題になっていますが，石見神楽はしばし安泰であるということ。それから，公立文化施設は住民にとって身近な施設でなければならない。これは極めて重要な事項だと思います。そして，地域の伝統芸能の伝承と発展を目的として，様々な取組みを行っていく必要があります。その一つとして，やはり後継者の発表の機会の確保。続いて，様々な分野とのコラボレーションによる挑戦といったことによる新たな魅力の醸成を行うことにより，新たなファンの取り込みにもつながっていくと思います。それから，神楽社中員と対等な関係を構築し，なんでも言い合える雰囲気づくりが発展にとって重要だと考えます。今後の取組目標としては，五大陸制覇に向けて，目指すはアフリカ大陸だということ。また，2025年の大阪万博に向けて積極的に取り組んでいく必要があるのではないかと考えています。（木原 義博）

2 GF神楽の活動

グラントワの伝統芸能事業の一つとして，石見神楽とコンテンポラリーダンスのコラボレーション企画『GF神楽』を展開しています。これは，近隣13社中による協議会「益田市石見神楽神和会」の20〜40代で構成する青年部と，国内外で活躍する振付家・ダンサーの藤田善宏氏（CAT-A-TAC主宰）との創造舞台です。GF神楽とは，「G」がグラントワのG，「F」が藤田氏のF，そして石見神楽を意味し，この三者が連携した新たな舞台作品づくりと位置付けています。第1弾は2017年，いわみ芸術劇場と併設の県立石見美術館の企画展関連イベントとして，石見神楽の演目『岩戸』のコラボレーション公演を開催しました。2019年にはいわみ芸術劇場の企画として，演目『KUROZUKA』（黒塚）の初演，『IWATO』（岩戸）の再演を行っています。

本事業のコンセプトの一つが「神楽における身体表現の可能性」です。神楽には，その手さばき足さばき，腰を落とした舞に伝統芸能ならではの身体性が感じられます。和の舞の美しさを受け継ぐ神楽継承者と，都市部のダンサーが結びつき，新たな舞台作品を作れるのもグラントワだからこそ目指せる取組みだと考えています。また，「ダンサーと神楽継承者の相互刺激」も目的としています。神楽継承者は普段は別の仕事をしており，身体表現や舞台のプロではありません。しかし，その舞には石見地域の暮らしに密接に結びついた文化と伝統が感じられ，これこそが地域の誇りです。プロダンサーたちは，伝統が詰まった舞に触発されるわけです。“今生きて舞う”ということに関してプロかアマチュアかは関係ありません。神楽継承者には，先人から受け継ぐ舞を同時代に生きるダンサーと共に余すことなく舞台で表現してほしいと考えており，この相互刺激こそがGF神楽の肝となっています。そして全体の大きなコンセプトとして，「神楽継承者と劇場との信頼関係と連携」を挙げています。石見神楽は継承者不足などの課題もはらんでいます。劇場としてはそれらの課題を共有し，互いに信頼しながら質の高い舞台づくりを目指しています。信頼関係なくして真の創造舞台とはなりませんし，地域の劇場と

GF 神楽　稽古の様子

GF 神楽『KUROZUKA』の一場面

芸能団体との連携に必要な事だと感じています。そのため，何をつくるかではなく，どうやってつくるかというプロセスを大切にしています。

ここで GF 神楽の稽古について紹介します。舞手の人と後ろの男性たちはそれぞれ別の社中に所属しています。普段は切磋琢磨する間柄ですが，GF 神楽だからこそ社中の枠を超えて稽古に励む興味深い場面で，真剣な眼差しが印象的です。

続いて演出についてです。『KUROZUKA』という作品の悪狐が剛力（修行者）を捕えるシーンです。藤田氏の演出によりダンサーが加わることで，より表現豊かで生々しいシーンとなっています。このように新たな創造舞台に対する出演者の意欲は高く，さらに表現の理解を深めるため，ダンサーと青年部は練習を重ね，時に語り合うなど時間をかけたプロセスを大切にしています。

続いての事業は，『しまね伝統芸能祭』です。「受け継がれる伝統芸能の“今”」をテーマに 2020 年 9～11 月の約 2ヵ月間にわたって開催しました。オープニング公演にて GF 神楽の第 3 弾『SHOKI －鍾馗－』の公演と生配信を行いました。また，期間中に多様な芸能団体の公演を県内複数のホールで開催し，地元プロ和太鼓奏者による地域の子ども達との和太鼓交流なども実施しました。また，この事業では映像やウェブサイトによる県内伝統芸能の発信に力を入れました。単に演目紹介や資料的な映像はなく，各芸能を継承する方々の暮らしに伝統芸能が根付いていることが伝わる映像づくりを目的として制作しています。

最後になりますが，劇場の役割として大事にしているのは，貴重な伝統芸能を守り，未来に繋ぐための事業展開です。安易なコラボレーションではなく，地域の伝統芸能の課題に向き合い，その上で表現そのものがもつ魅力や熱を，関係者や出演者と共有しながら進めることが大事だと考えています。そのためには，劇場が各芸能団体にとってよりよい方向へあゆんでいける一助となるよう信頼関係のある繋がりを大切にしていきたいと思います。（福間 一）

3 益田糸操り人形の活動

グラントワでは，島根県無形民俗文化財『益田糸操り人形』の支援事業を行っています。益田に糸操り人形が伝わったのは明治 20 年頃と言われ，約 130 年にわたり継承されている伝統芸能です。現在，「益田糸操り人形保持者会」が所作を継承し，当時のままの人形は，県の有形民俗文化財にも指定されている人形浄瑠璃芝居です。定期公演の他，近隣施設への出前公演や，現代人形劇センターと連携し，三味線・義太夫・人形遣いの養成講座も実施しています。技術的な継承支援と，その成果発表として各種公演を行っています。

年 3 回開催されるグラントワ定期公演の舞台設営・音響・照明準備などが伝統事業の舞台技術部門からの主な支援となります。糸操り人形の専用舞台として，保持者会が 3 種類の舞台を所有しています。1 つ目はグラントワ定期公演で使用するアルミ製の舞台。2 つ目はグラントワ以外のホー

ル公演用の木製舞台。3つ目は学校公演で使用する小さいサイズの舞台となります。この学校公演舞台は約20年前，当時の技術職員が簡単に移動・設営可能な舞台が出来ないかと，演者の意見や人形舞台の採寸を行い，地元業者へ依頼作成したものです。定期公演で使用するアルミ製舞台は，保持者会が作成されたものですが，いざ設営してみると必要以上に長い柱に仕上がっていたり，連結部のネジ穴が小さすぎたり，非常に設営しづらい事が判明しました。定期公演がない時は，舞台を解体しホールで保管しますので，設営や解体が容易でないのは，長期的にデメリットとなります。最終的に技術職員が再度，上演所作と舞台構造を検討し，修正してもらうようお願いに行った事もあります。特殊な舞台の構造を知っている技術職員ならではの技術支援とも言えます。

定期公演のほか，催し物のゲストでの上演依頼や，全国の民俗芸能大会への出演など，ここ数年でグラントワ以外での公演もかなり増えてきました。通常，技術職員1人が同行し，出向いた先の技術者と舞台の搬入・設営・搬出・または音響・照明など必要機材の調整を行います。益田糸操り人形の舞台は，通常の舞台の上に，さらに人形用舞台を設置します。演者は人形舞台高さ約1.5m上の歩み板から人形を操るため，かなり特殊な形状の舞台と言えます。舞台は横が約5m，高さ3.5m，奥行きが2.5 m，約40個の部品で構成されており，総重量は約680キロあるため，限られた時間で準備・本番・片付け等を円滑に行うには，入念な下見や打ち合わせが重要です。部品も多く重量物である為，周りの安全確保も大切な仕事です。打ち合わせを行う技術者も人形舞台を初めて見る場合が殆どのため，設営に対し，イメージが湧くように分かり易い説明が必要となります。

『益田糸操り人形』操演の様子

海外公演として，2016年にイギリスのロンドンにあるヴィクトリア＆アルバート博物館で，『日本ファミリー・フェスティバル』という日本文化を紹介する催し物に出演しました。輸送経費削減のため，現地技術者が制作した舞台での公演となりました。事前に必要な舞台形状や配置等を調整していましたが，到着すると，当初の要望と異なる事が多く，通訳を介しながらの再調整となりました。普段の公演とは違う状況となったため，演者が混乱しないよう動きの確認，指示出し，タイムスケジュール管理，人員配置などの資料作成も技術支援の一つとして行いました。技術支援とは少し異なりますが，ロンドン公演の際，演者も最少人数だったため演じる役が不足しており，一演目だけ保持者会の方に混ざって出演もしました。

複数の団体が出る催し物に出演する際，人形舞台の撤去時間を考慮したプログラム順にして頂く事を事前にお願いします。しかし，実際には次の出演団体が，すぐに始まるスケジュールになっている事がありました。撤去時間が必要な旨を再度説明しましたが，既にプログラムを作成した後で順番の変更が出来ず，どうにか30分だけ時間を頂き撤去した事もあります。時間がないと人は慌てますし事故の元にもなりますので，とても緊張しながら撤去した記憶があります。

益田糸操り人形保持者会は21名で活動されており，大人数の団体ではありませんが，小学生から高齢の方まで幅広い年齢層で構成されています。これからも，伝統が引き継がれるとともに技術支援も引き継がれていくのものだと信じております。

（山﨑祐子）

※GF神楽，益田糸操り人形などの映像はグラントワ公式youtubeチャンネルよりご覧いただけます。